長詩
梅川忠兵衛
脚飛の途冥
近松門左衛門原作清水橘村作詩

梅川忠兵衛

冥途の飛脚

詩作村橋水清　作原子林巣詩

序

是を詩學の上より觀るに、巢林子の世話物は、形式に於て戯曲的叙事詩たり、内容に於て Minnesng たるものにして、もと歌はんが爲め作れるものなれば、散文と稱せんには餘りに遠し。寧ろ韻文として複雑なる諧調を備ふものと見る方、穏當なるべし。余輩、今これを普通新體詩の書式たる、一句切斷の法にならひて、自ら作詩と稱す。屋上屋を建つるに似て、世人の嘲笑を買はんは固より期するところ。唯斯の如くして、世人の眼に入り易く、實際的方面に多少の貢献を得ば、余輩がこの圖また徒勞ならずとせじ。

近來詩歌をして實際的方面に推しすゝめんと企圖するもの多し、是を大にしては、早稲田大學に於ける、文藝協會の如く、これを小にしては、

一般有識者が唱ふる詩歌朗吟論の如し。彼の某々詩人等の新體詩朗吟會は、この點に於て先驅たるの榮譽を荷ふものと謂つべし。余輩又新體詩が社會に容るるの方便として、其或物が、書生にも唱され、女學生にも歌はれ、宴會の席上にても誦はれむとを望む。これは決して夢想兵衛が胸中のものにもあらざるべし。

此手段として、新作のものよりも、是まで世人に最も記臆されし、近松の淨瑠璃の如き、最も有功ならんと信ず。

これ余がその作なせる所以なり。

丙午三月

澁谷川のほとり、蘆の丸屋にて

橘村生しるす

梅川忠兵衛 冥途の飛脚

原作　近松門左衛門
作詩　清水橘村

(互の巻)(一)

澪標、
難波に咲くや此花の、
里は三筋の名もしるき、
佐渡と越後の相の手を、
通ふ千鳥の淡路町。
龜屋の世繼忠兵衛は、

今年二十歳の上はまた、
四年以前に大和より、
敷金持て養子ぶん。
後家妙閑の介抱ゆゑ、
商賣功者駄荷つもり、
江戸へも上下三度笠。
茶の湯、はい諧、碁、雙六、
延紙に書く手の角取れて、
酒も三つ四つ五つ所、
紋羽二重も出ず入らず、
無地の丸鍔象眼の、
國細工にはまれ男。
色の仔細知り里知りて、

暮るゝを待たず飛ぶ足の、
飛脚宿の忙がしさ。
荷を送るやら解くやら、
手代は帳面算盤を、
奥口ともにどや〳〵と、
千萬兩の遣繰も、
筑紫吾妻の取遣も、
居ながら金の自由さは、
一分小判や白銀に、
翼のあるが如くなり。

二

折からかへる狀取の、

町へ廻りてそれ〳〵と、
留狀つくる、金盡る、
人の命も駄荷馬の、
蹄にかゝる石に似て、
ころり轉げてその先は、
一寸見えぬ闇の世を、
戀に浮れて明鴉。
『忠兵衛は居やるか』と、
案内するは御屋敷の、
侍なれば慇懃に、
手代は出でゝ手をつかへ。
『やア是は甚内樣、

忠兵衛は留守なれど、
お下し物の御用なら、
私に仰られませい。』
お茶持て來よと呼ぶ風も、
大店なれば商賣の、
人をそらさぬ上手なり。
『いや〳〵下りの用はなし、
江戸若旦那より寄越された、
御狀によれば急用で、
此月二日の三度にて、
上せた金子三百兩、
今日までも屆かぬ故、
大事の御用の手筈が違ふ、

以ての外の癖事ぢや。』
顏をしかめて述べけるも、
主人を借れる威光なり。
『御尤も〳〵、去りながら、
知つての通り此中の、
雨降りつゞき川々に、
水が出まして道中に、
日が込み金の屆かぬは、
手前も大分の損銀、
若し盜賊か切取か、
途からふつと出來心、
萬々貫目取られても、
仲間の宿から辨へて、

決して御損かけませぬ。』

『おゝ言ふまでも無とちや、御損かけては忠兵衛の、首がころりと風に飛ぶ、日限延びては大切の、御用の間があくにより、迎ひの飛脚遣して、早速に持参せい。』

徒士若黨も腰に差す、刀の威光拵へも、銀か胡散な猿眼、光らかしたる頂天の、するり抜けたる生れ付、

なまり散らして歸りしが、又も入り來る人影は、心も太きたん波屋の、八右衛門が使なり。

『頼みませうノ〳〵。江戸から上つた爲替銀、添狀は届いたが、金は何故届きませぬ、文を進せば返事なく、使を遣れは蒟蒻の、酢つぽり甘く言拔て、何時方届けさつしやるぞ、さア金子請取ふ。』

立跨つて喚く聲、
納戸の人に聞かせじと、
手代伊兵衛は立出て、
漸く申し返しけり。

三

母、妙閑は炬燵の側、
やつと離れて納戸を出で、
『やア今のは何ぞ、
丹波屋の金の届いたは、
慥か十日も以前のと、
何故忠兵衛は渡さぬの、
今朝から二軒三軒の、

金の催促聞て居る。
親父の代から此家に、
金一匁の催促えず、
終に仲間へ難儀をかけず、
十八軒の飛脚屋の、
龜鑑と言はれたこの龜屋。
皆は心も注かぬか、
忠兵衛が此頃の、
素振が如何も呑込めぬ。
昨今の者は知るまいか、
地體これの實子でなし、
もとは大和　新口村、
勝木孫右衛門といふ、

大百姓の一人子。
いとしや母御前は死やつて、
繼母かゝりのわざくれに、
惡所狂も出來るぞと、
父御が深い御思案で、
これの家督に貰ひしが。
世帶廻り商賣事、
何に思はなけれども、
この頃はそは〳〵と、
何も手につかぬと見た。
意見の仕たい事あれど、
養子の母も繼母も、
同然と思はふか、

せは〳〵言ふより言ぬ身を、
恥入せふと目を睡つても、
聞き所、見所は見て居る。
何時の間にやら大氣になり、
延の鼻紙二三枚、
手當り次第鼻拭みやる、
過逝かれし親父の咄に、
鼻紙びんぴと遣ふ者は、
曲者ぢやと云はれたが、
忠兵衛が家を出さまに、
延紙三折宛入て出で、
何程鼻を拭むのやら、
戻りには一枚も殘らぬ、

身が達者の若いのとて、
彼の様に鼻拭んでは、
何處ぞで病も出ませう。』と
愚痴小言して入りければ、
丁稚小僕も笑止がり、
早う歸つて下されと、
待つ日も西の戻足、
見世鎖頃になりにけり。

四

籠の鳥なる梅川に、
焦れて通ふ廓雀。
忠兵衛はとぼ〳〵と、

外の工面や内の首尾、
心は蜘手かく子はや、
十文色も出てくるは、
南無三寶、日が暮れるとて、
地を踏む足も空さまに、
門口には着けれど、
留守の間に方々の、
催促問え妙閃が、
耳に入つたも氣遣し、
誰ぞ出で來よと待てば來る、
北の町から八右衛門。
『これ忠兵衛、
外すまい〳〵。』

言はれてハッと驚けど、
逃れ隠るゝ方もなく。
『や、八右衛門、
此中は久しい……。
昨日も今日も一昨日も、
人遣ろ〳〵と思ふて、
何やかや延引した……。
めつきりと寒いが、
親父の疝氣は……。
婆々樣の齲は……。
ア、甚ふ酒臭い、
過しやるな〳〵……。
明日は早々人遣ふ、

や、れこが言傳したぞや、
近日一座致したい。』
たらしかゝれば八右衛門、
いどゝ怒りの眉を上げ。
『措けやい。
口三味線に乘せかけても、
乘る樣な男でない、
其方が商賣は三度でないか、
身が方へ上つた江戸爲替、
五十雨は何として届けぬ。
五日三日は了簡も有ぞかし、
心易いは格別なれど、
高駄賃かくからは大事な家職、

十日に餘れど埒明ず、
今日も使をやつたれば、
手代奴が嵩高な返事をした、
よもや他へは左樣あるまい、
八右衛門を甥るか。
北濱、鞆、中の島、
天滿の市の側までも、
親父と言はるゝ八右衛門、
甥つてよくば甥られふが、
金はどうでも請取ふ、
但し仲間にこたへふか。』
母に逢ふと身を飜す、
袂にすがる忠兵衛は、

不覺の涙はら〳〵と、
霜置く石にこぼせしが。
『去りとては誤まつた、
これ手を合す聞いてたも、
何を隱さうその金は、
十日以前に上りしが、
知つての通り梅川が、
田舍の客と張合ふて、
請出す談合破らせた、
手付の金と渡せしも、
眞實言はねば虛となり、
借たと云ふも出來ぬ仕義。
今更面目無いなれども、

此忠兵衛を人と思ば腹も立、
犬の命を助けたと、
四五日了見頼み入る。
是を思へば世の中に、
處刑者の絶えぬも道理、
此上は忠兵衛も、
是程にてはよもあらじ。』
盗みせうより外はなし。
『言憎い事能う言ふた、
男の口から斯様の事、
丹波屋の八右衛門男じや、
言れうものか推量あれ、
咽より剣を吐くとても、

了見して待てやる。』
『忝い〳〵、
父二人、母三人、
親は五人持つたれども、
其恩よりは八右衛門、
貴殿の御恩忘れぬ。』
兎角うは涙寒き夜の、
闇は文なく男同士、
立別れんとせしも、
内より母の聲として、
忠兵術是へ通しやと、
言はれて這入奥座敷、
きり〳〵きつと律義なる、

母に急り立て責められて、
鬢水入を墨黒に、
似せも似せたり五十杯、
母に一杯参らせし、
駿河包の五十金。
また瞞されし正直の、
親の心や佛の顔も、
三度飛脚の江戸の左右、
待夜もふくる福の神の、
戸外に馬の鈴の音、
こりや〳〵駄荷が着たぞ、
中戸〳〵と聲高に、
手ん手に葛籠擔込む。

忠兵衛親子機嫌よく、
さア拍子が直つた、
來年も仕合馬、
馬子衆に酒よ煙草よと、
硯控えて帳付て、
家内とんどと賑へば、
手代の伊兵衛けうとげに、
『なふ堂島のお屋敷から、
金三百兩九日に來る筈、
前狀が上たが何とて遲い、
と甚内殿が睨付て歸れた、
何と〳〵。』と言いければ
宰領が帕腹よりその金『合點』

方々の爲替〆高八百兩、
くわらり〳〵と取出す、
忠兵衛いよ〳〵勢よく、
白銀は內庫へ金子は戸棚、
母者人私は之よりお屋敷へと、
金懷中に羽織の紐、
結ぶ霜夜の門の口、
出馴し足の癖になり、
心は北へ身は南。
往て退ふか往まいか、
氏神さまのお誘ひに、
鳥渡と顏見て戻つてと、
一度は思案二度三度、

三度飛脚の行もどり、
合せて暗き六道の、
冥途の飛脚、——えいとなア。

（中の巻）

一

唄『えい〳〵鴉がな〳〵、
浮氣鴉が月夜も闇も、
首尾を求て逢ふ〳〵とさ。』
青編笠の紅葉して、
炭火ほのめく夕まで、
思ひ〳〵の戀風や、
戀と哀れは種一つ。
梅薫しく松高き、
位はよしや引締て、
哀れ深きは見世女郎、

さらさ禿が知邊して、
橋が架たや佐土屋町。
越後は女主人とて、
立寄る妓も氣兼せず、
底意殘さぬ戀の淵、
身の憂きしほで梅川も、
此所を思ひの定宿と、
餘所の勤も垣の本、
島屋を鳥渡島隱れ。

二

『申し淸さん、今日は島屋で、
彼の田舍のうてすにせびらかされて、

頭が痛い、
忠樣はまだ見えぬかえ。
せめての由緣に、
此方樣の顏が見たさにかしに來た。』
伽羅の馨りのゆかしさも、
戀ふるに近き梅川が、
待つ間も心落付かぬ、
袂かへして今日もまた、
いとし糸ひくその緣。
『さつても能う御座んした、
あれ二階にも、
女郎達が大勢、
遊びに御座んして、

お客待間の酒事、
拳をして御座んする、
此方さんもお氣晴しに、
一拳して酒一盞、
朋輩衆も御座んする。』
上る二階の隙間風、
男交ずの火鉢酒、
拳の手品の手も撓く、
ろませ、さい、とうらい、さんな、
同じ事よと豊川に、
戀の高瀬が差す腕には、
はま、さんきう、ごう、りう、すむね。
『それ〳〵何んと、

地體一つは鳴渡瀬様、
あれ梅川様の御座んした、
なふ好い處へ來て下さんした、
此方様拳の上手、
宵から千代歳様に、
仕付られて無念な、
敵取つて下さんせ、
銚子直せ。』——と。
はやす心に引かへて、
涙にとくる白粉の、
冷たき襟に顯かくす、
世を梅川の憂き思ひ、
ときめく伽羅の袂にも、

餘る歎きの投島田。
鏡にうつる後れ髪の、
二筋三すぢ倚る人の、
金に言はすする佗々羅舞。
大盡客の言葉とて、
走る主人の北叟笑、
さてもしん氣な帶解けて、
牡丹に狂ふ唐獅子の、
花の眞紅の石橋を、
叩きてもなほ引離れ、
離れ〳〵となる端の、
帶は又逢ふ中ながら、
二人の運は冷たしと、

白き手をひく緋縮緬、
襦袢の袖の裏さへも、
身を置きかねし梅川が。
『あゝ、うたての酒や、
拳をする氣もあらばこそ、
この梅川が今の身を、
少しは泣いて貰ひたや。
田舎の客が身請の事、
今日も今日とて島屋にて、
理屈を詰て強請事。
腹が立つやら憎いやら、
とは言ひながら是は先、
忠兵衛樣は後手と言ひ、

宿の勢力一つにて、
手付も渡し約束の、
日限切れるも言延し、
今日までは繋がりしが。
忠様も世帯もち、
養子の母御の手前といひ、
屋數歴々の町方を引受て、
東路かけての大事な商賣、
如何なる事が邪魔になり、
田舎の客に請られては、
我身一つで死でも退ふ。
天神太夫の身でもなし、
さもしい金に氣が觸れた、

見世女郎の淺ましと、
世間の唱へ朋輩の、
掃部殿を始めとして、
格子女郎衆の手前もあり。
忠様と本意を遂げ、
兎やかう人に唄はれし、
面が脱ぎたう御座んす。』
泣きしみづきて語るにぞ、
一座の女郎身の上に、
思ひ合せて尤もと、
連れて涙を流せしが、
戀の誠の味しらぬ、
中の一人が。——

『あゝ甚ふ氣が沈る、
わつさりと淨瑠璃にせまいか。』と。

はやせば上る三の糸、
習ひ覺えし三味線の、
調べに暮るゝ夕霧や。
昔を今に彈きかけて、
傾城に誠なしとは申せども、
それは癖事譯知らず。
誠も嘘ももと一つ、
假へば命擲ちて、
如何に誠を盡しても、
男の方より便なく、
遠ざかるその時は、

心矢竹に思ひても、
斯した身なれば儘ならず、
自ら思はぬ花の根引に逢ひ、
掛し誓ひも嘘となる。
また始より僞りの、
勤めばかりに逢ふ人も、
絕えず重ぬる色衣、
ついに寄邊となる時は、
始の嘘もみな誠。
兎角唯戀路には、
僞りもなく誠もなし、
緣のあるのが誠ぞや。
逢ふことならぬ男をば、

思ひ〳〵て思ひがつもり、
思ひさめにもさむるもの、
辛やしよざいと恨むらん。
恨まば恨め世にもまた、
最愛いといふこの病、
勤めする身の持病かと、
戀に浮世を投首の、
酒もしらけて醒めにけり。

三

糸よりさゆる淨瑠璃の、
聲を聞つけ八右衛門。
『やア聞知つた妓の聲、

華車内にか』と入りにしが、
柄差箒を手にとりて、
トンと二階を突鳴らし。
『女郎衆餘まりぢや、
此處にも人が聞て居る、
如何なる男でそれ程に戀しいぞ。
男が無うて寂しくば、
お氣に入らずと、
是にも一人貸てやろ。』
喚けど知らぬ梅川は、
翼重たき鴛鴦の、
番ひ離れて霜の夜を、
葦のふすまに夢やぶれ、

一人物思ふ聲細く。

『でも逢ひたいが情ぢやもの、
憎いなら來て叩かんせ、
清さん下なは誰様ぢや。
……何中の島の八様え！。

彼の様には逢ともない、
皆様下りて下さんせ、
私が二階に居ることを、
必ず〳〵言ふまいぞ、
其處らは粹ぢや。』

眼もて頷きさゝやきて、
かばふもよしや梅川の、
花の姿のいとほしと、

七重八重杉玉椿、
常盤の色の妓達は、
皆々出る下座敷、
八右衛門も待受けて。

『やア千代歳様、鳴渡瀬様、
歴々の御參會、
梅川殿は宵の口、
島屋を貰ふて往なれたげな。

忠兵衛も見えそもない、
花車此處へ寄らつしやれ、
女郎衆も禿共も、
忠兵衛が事につき、
耳打て置くことがある、

此處へおじやれ』。

『はて氣遣なお言葉』と、

二階にひとり梅川が、

消ゆる炭火に手をかざす、

惡い噂も聞かせんかと、

皆氣を配る折ふしに、

戀に憚るヽ忠兵衛の、

しやらり雪駄も世を忍ぶ、

心の氷三百兩。

身も懷も冷ゆる夜に、

ゑちごやにこそ走着き、

內を覗けば八右衛門、

横座をしめの評判の、

わが身のうへと立聞す。

二階には又梅川が、

心を澄す壁に耳、

漏るヽぞ仇の始なる、

斯と知らねば八右衛門、

座中見廻し顏をあげ。

『斯う言へばとて忠兵衛を、

憎み猜みの爲ならず。

身の成果がかはゆいに、

尤も千兩二千兩、

人の金子を托り、

暫の宿は貸けれど、

手金とては家屋敷、

家財をかけて十五貫目。
二十貫目に足らぬもの。
大和の親が長者でも、
龜屋へ養子に越すからは、
高の知れたる御百姓。
斯う言ふ己も若い者、
慣ひに捨てる一貫目、
年に五百目そこいらは、
揚屋に敷かぢやならぬもの。
身にも應せぬ忠兵衛が、
あの梅川にのぼり詰め、
島屋の客と張合ふて、
身請の金の百五十兩。

內の手付を渡したが、
それ故人の届け金、
不埒になつて嘘八百、
甚ふ小尻が詰る時、
今でも川が事極り、
出るになつたら借錢も、
山ほど殘るその中で、
泣ても大い二百五十兩。
天から降るか地からまた、
湧くよなことがあらうかえ、
盜みせうより外は無い。
あの手付した五十兩、
何處から出たと思召す、

身が方へ來る江戸爲替、
中で取り置き遣ふたを、
それとも知らず請に行き、
養子の母御がいとほしや、
上つた金は知てなり、
渡せ〳〵とせつかれて、
忠兵衛が渡した小判、
お目にかけふか。さらば此、
正體とくと現はして、
獄門の種御覽あれ。』
言ひつゝ解く五十両、
延紙に包んだ水入の、
その燒物は白くとも、

白銀ならぬ薄光、
女郎も主人も禿さへも、
はア、とばりに怖氣立ち、
身を縮むれば二階には、
顔を疊に摺付て、
聲を隱して忍び泣き。
短氣は損氣、忠兵衛は、
カッと急き立ち懷の、
金を押へて幾度か、
『若い者に恥かゝせ、
川が聞いたら死にたかろ、
懷中の三百両、
五十両引拔て、

頬へ撲付け、
存分言ひ、
我身の一分、
川が面目雪いでやらう、
あゝされど是は武士の金、
殊に急用、
爰が大事の堪忍。』と、
手を懐へ幾度か、
兎やせん角やしやうげ鳥、
の嘴の齟齬ふ、
心知らぬぞ是非もなき。
八右衛門は延紙包、
金の封じを解きながら。

『これも買つたら十八文、
いかに相場は安いとて、
五十を二分五厘替え、
神武この方無い事じや。
友達でさへ是なれば、
他人を騙るは御推量、
この次は段々に、
偸掏兒から土藏破り、
果は首切、獄門の、
上にかゝるが定のもの、
斯の如くに亂れては、
主親の勘當も、
釋迦、達摩の意見でも、

聖徳太子が敎化でも、
いつかな〳〵直らぬ、
この沙汰ばつとして、
寄せつけぬ様頼みます。
梅川殿へも吹込で、
此方から挨拶切り、
島屋の客にさらりつと、
女郎の衣裳を盜むか、
みな彼の流か心中か、
片小鬢剃こぼされ、
大門口に曝されて、

友達の一分捨てさする、
人でなしとは彼が事、
可愛くば寄付て下さんすな。』
語るを聞けば梅川も、
悲しいと最愛いと、
身の敢果なさを掻混て、
胸引き裂ける忍び泣き。
『あゝ乃物がな、
鋏でも、
舌を切つても死たい。』と、
煩悶伏したる苦みを、
下には各推量し、
『ひよんな心にならんした、

いとしぼいは川様。』と、
若き禿も紫の、
長き袂を絞りけり。

四

蔭に聞居し忠兵衛は、
怒る心を押へかね、
ずんと現はれ八右衛門が、
膝に無手と居懸つて。
『これ丹波屋の八右衛門殿、
常々の口ほどあつて、
おゝ男ぢや、見事ぢや、
三人寄れば苦界、

忠兵衛が身代の、
棚下ししてくれる。
忝い、是や此水入も男同士、
母の心を安める爲、
請取てくれるかと、
謎をかけて渡したを、
此忠兵衛が五十兩、
損かけふかと氣遣さに、
廓三界披露して、
男の一分捨てさする。
但又島屋の客に賄賂取て、
梅川に藁を焼き、
彼方へ遣ふといふ事か。

措てくれ、
氣遣ひすな、
五十兩や百兩、友達に、
損懸る忠兵衛ではござらぬ。
あゝ八右衛門樣、
八右衛門奴、
さア金渡す、
手形戻せ。』
言ふより早く懷の、
金を探りて取り出し、
包み解く手を押とゞめ。
『コリヤ待て忠兵衛、
餘程の痴氣を盡せ。

其心を知つたるゆゑ、
意見をしても聽くまじと、
廓の衆を賴んで、
此方から除て貰ふたらば、
根性も取直し、
人間にもならふかと、
男づくの懇だけぢや。
五十兩が惜ければ、
母御の前で言ふわいやい。
てんがうな手形を書き、
無筆の母を宥めしが、
これでも己が届かぬか。
その金嵩も三百兩、

手金の有ふ筈もなし、
定めて何處ぞの仕切金、
その金に疵を付け、
八右衛門仕たやうに、
髪水入では濟むまいぞ、
たゞし代りに首遣るかい。
のぼり詰たその手間で、
届ける處へ届けてしまへ、
性根の据らぬ狂氣者。』
『いや〳〵仁義措てくれ、
此金を餘所のとは、
何處から押た言葉ぢややい。
この忠兵衛が三百両、

持つまいものか女郎衆の、
前で身代見立られ、
猶返さねば一分立ず、
……これ龜屋忠兵衛が、
人に損をかけぬ證據ぢや。』
さア請取れと手につかみ、
ぱつと投げたる木の葉雨。
『ヤ、男の面へ何とする、
忝いと禮いふて、
返し直せ！。』
『おのれに何の禮言ふ。』
包解いて十、二十、
三十、しゞう五十両。

詰る手許のいや更に、
見すかされたが剛腹と、
取りて投付け投返し、
腕捲りしてきしみ合ふ、
梅川、涙に暮れながら、
階子駈下り。——
『喃すつきり妾が聞きました、
皆八様がお道理ぢや、
これ手を合せる、
梅川に許して下さんせ。——
情なや忠兵衛様、
なせその様に逆上らんす。
何を目的に他人の金、

封を切て撒散し、
詮議に逢ふて牢櫃の、
縄にかゝるその耻と、
この耻と換らるゝか。
耻かくばかりか梅川は、
何となれと云ふことぞ、
篤くと心を落しつけ、
八様によう詫言し、
金を束ねてその主へ、
早ふ届けて下さんせ。
妾を人手に遣ともない、
それは此身も同じこと、
身一つ捨つると思ふたら、

みなこの胸に籠てある。
年とても先二年下、
宮島へも身を仕切り、
大阪の濱に立つても、
此方様一人は養ふて、
男に憂目かけまいもの、
心を静めて下さんせ、
淺ましい氣にならんした。
斯うは誰が仕た、
妾が仕た、
皆梅川が故なれば、
忝いやら最愛いやら、
心を推して下さんせ。』

小判の上にはら〳〵と、
涙は井出の山吹に、
露置き添ふるその姿。
柳みだるゝ黒髪の、
綠の匂ひこぼれては、
影もとまらぬ夕月や。
打臥す春の若草の、
袖にすがれる蝶々の、
翅もつひにやすまらず、
忠兵衛は氣も有頂天、
前後括らぬ合莚、
敷金のこと思ひ出し。
『はて姦しい、此忠兵衛を、

それ程痴氣と思やるか、
この金は氣遣ない、
八右衛門も知て居る、
養子に來る時大和から、
持て來て預けた金、
身請の爲に取戻した。』
華車よ此處へと呼びよせて、
『川が身の代百五十両、
いつぞやゝた帳面の、
借金積つて四十両、
また揚錢が二十両、
五両は鴇婦、十両は、
其方への祝儀骨折分、

林も五兵衛も玉もみな、
一両宛ぢや來い〳〵。』と、
金銀降す邯鄲の、
夢の中なる榮耀なり。
『さア今の間に埒明けて、
今宵の中に出る樣に、
賴む』と急ぐ忠兵衛が、
焔火とめぐる胸の內、
知らでや勇む春駒の、
來る〳〵舞ひて落葉風、
主人は走り去りにけり。

五

八右衛門は濟まぬ顏、
誠とは思はねど、
只さへ貰ふこの小判、
返すものを謂れぬ辭儀、
『五十兩慥に請取た、
手形戻す。』と投出し、
妓が顏貌、花の風、
ともに吹かれて歸り行く、
人の姿を見送りて、
『さア〳〵此間に身拵へ
べた〳〵した風姿、
帶もきり〳〵と仕直しや。』
『何ぞいの、その樣に、

急がしやんすともあるまい、
一代の外聞に、
朋輩衆へも盃事、
暇乞も譯能ふして、
寬りと出して下さんせ。』
『いとしや何も知らずか、
今の小判は堂島の、
お屋敷の急用金、
この金を散しては、
身の大事は知れたこと、
隨分悚えて見つれども、
友女郎の眞中で、
可愛い男が恥辱を取り、

和女の無念さ、
晴したいと思ふより、
ふつと金に手をかけて、
最う引かれぬは男の役。
斯うなる因果と思ふてたも、
八右衛門が面相、
直に母に吐す顔、
十八軒の仲間から、
詮議に來るは今の事、
地獄の上の一足飛、
飛でたもや。』——とばかりにて、
流石堪へしためなみだ、
瀧を懸けたる如くなり、

梅川はアと慄ひだし、
聲も涙にわな〳〵と。
『それ見さんせ、
常々言ひしは此所の事、
何故命が惜いぞ、
二人死ぬれば本望、
今とても易いこと、
分別据て下さんせなふ。』
『やれ命生やうと思ふて、
此大事がなるものか、
生らるゝだけ添るゝだけ、
高は死ぬると覺悟しや。』
『あゝ左樣ぢや、

生らるゝだけ此世で添ふ、
今にも人が來る、
此處へ隱れて御座んせ。』
屏風の隱に押入れて、
咽返りてぞ歎きける、
越後主從立歸り、
おさうそふなが酒はいの、
酒も咽には通らぬと、
夕告鳥に別れ行く、
榮耀榮華も人の金、
果は砂場を打過て、
跡は野となれ大和路や、
足に任せて落ちにけり。

一

睦まじく、
枕並べし閨の内、
馴し襖の終夜も、
四つ門の跡、夢もなし、
さるにても我夫の、
秋より先に必ずと、
仇し情の世を頼み、
人を頼みのヲ綱断れて、
夜半の中とも引替て、
人目の關にせかれゆく、

昨日のまゝの髪付や、
髪の髷目のほつれたを、
髷て進じよと櫛をとる、
手さへ涙に凍えつき、
冷たる足を太股に、
相合炬燵相輿の、
駕籠の息杖生てまだ、
續く命がふしぎぞと、
二人が涙こぼれ口。
明けぬ間は暫しとて、
垂れし簾をあけてさへ、
膝組かはす戀中の、
狹き局のありし夜の、

逢瀬に似たは似たれども、
炭の埋火いつしかに、
朝の霜と置かへて、
夜半の嵐に呼ばれては、
こたふる野邊の禿松、
すぎしその夜が思はれて、
いとゞ涙の種ならん。
何くど〳〵と思ふぞや、
これぞ一蓮托生と、
慰めつ又なぐさみに、
比翼煙管の薄煙、
霧も絶え〳〵晴れ渡り、
麥の葉苗に風荒れて、

朝出の賤や火を貰ふ、
野守が見る目恥しと、
駕籠立てさせて暇を遣る、
値の露の命さへ、
惜からぬ身は惜からず、
猶も惜まぬ徒歩素跣、
惜むは名殘ばがりぞや。
終に着馴れぬ綿帽子、
妾が顔より此方樣の、
肌にこれをと風防ぐ、
ひらり帽子の紫や、
色で逢ひしはいや昔、
今日は眞身の女夫合。

頼まば願へ庚申、
庚申堂よと伏拝み、
振返り見るしやうまんの、
愛染様に愛嬌を、
祈る芝居の子供衆や、
道頓堀のいろ〳〵に、
馴し廓のそれぞとは、
紋で覺えし提灯の、
中に果敢なや槌屋うち、
此木瓜に打添て、
妾が紋の松皮の、
松の千歳を祈りしに、
定めぬ契り提灯の、

消ゆる命の夕には、
この紋つけて我中の、
經帷子と觀念し、
冥途の道を此やうに、
手を引かふぞや引れふと、
又取替し泣く涙、
袖の氷と閉合り。
誰が關据ぬ道なれど、
問ひ〳〵行けば捗行かず、
今朝の姿をそのなりに、
素足に雪駄しみつけば、
空に霙の一曇、
あられ交りに吹く木の葉。

ひらり平野に行懸り、
此處は知る人多ければ、
此方へ〳〵と袖覆ひ、
里の裏道畦道を、
すぢりもどりて藤井寺、
あれ〳〵あれを見や、
何處の田舎も戀の世の、
背戸に菜を摘む十七八が、
門に立つたは忍びの夫かへ、
野風身の毒、此方入らしやんせえ』。
餘所の睦言妬ましく、
それ覺えてか何時のこと、
彼の初雪の朝込に、

寢衣ながらに送られし、
大門口の薄ゆきも、
いま降る雪もかはらねど、
變りはてたる身の行衛。
我ゆゑ染ていとほしや、
元の白地を淺黄より、
戀は譽田の八幡に、
起請誓紙の筆の罰、
和女を除けてと泣く涙。
暫し人目の許しはあれど、
申これなふ去とては、
妾が身とても儘にはと、
末は涙の果しなく、

延紙の三つ折絞るにも、
裾に窶るゝ小笹原、
霜に枯野の薄原、
茫々さら〳〵颯と鳴りたるは、
我を追手の尋ぬるよと、
覆ひ重なり影隠し、
ふりさけ見れば人にはあらで、
妻戀鳥の羽音に怖る身となるは、
如何なる罪の報ひぞと、
口説き歎きて行く姿。
泣くか、笑ふか、富田林の夕鴉、
切めて一夜の心なく、
咎むる聲の高間山、

彼の葛城の神ならで、
晝の通路つゝましや、
身を忍ぶ道、戀の道、
我から狹き浮世の道。
竹の內峠袖濡れて、
岩屋越とて石道や、
野越え、山暮れ、里々越えて、
行は戀ゆゑ、——罠の鳥。

二

『これ梅、
此處は我が生れた在所、
二十歳まで育つて覺えしが、

師走の極に此如く、
諸勸進商人、春とてもない事あれ、
彼方にも立て居る、
野外れにも二三人、
胸騒ぎもして來た。
四五町往けば眞の親、
孫右衛門の家なれども、
不通と言ひ繼母なり、
此藁葺は忠三郎とて、
下作あてた小百姓、
腹の中から深い馴染、
頼母しい男なれば、
先つ此處へ』。—と手を引いて、

無慘やな忠兵衛は、
我さへ浮世忍ぶ身に、
優しき妻が風俗の、
人の目立を包みかね、
借駕籠せまき日を送り、
奈良の旅籠屋三輪の茶屋、
五日三日と夜を明し、
二十日餘りに四十両、
遣ひ果して二分殘る、
鐘も霞むや初瀬山。
餘所に見捨て親里の、
新口村に着きけるが、
さすが吾家に入りかねて、

昔馴染の作男、
鳥渡呼ふでと急き立つる、
お內儀は知らぬ賤の女の、
襷かけして走り行く。
跡の門口梅川が、
はたと鎖して鉤鍵かけ。
『是は眞の敵の中、
大事ないか』と言ひければ、
『忠三郎と言ふ者は、
百姓に稀な男氣を持た者、
頼んで一夜逗留し、
死ぬるとも此處、
故郷の土は身を成して、

生の母の墓所、
一つに埋れ、
嫁姑の未來に對面させたい。』
言へば『嬉しう御座んすが、
妾が母は京の六條、
定し此間詮議に人が往つらん、
日頃が眩暈持なれば、
何うならんした事やら、
ま一度京の母樣にも、
一目逢ふて死度そや。』
『おゝ道理とも、
我も和女のお袋に、
聟ぢやと云ひて逢い度い。』と、

人目なければ抱合ひ、
涙の雨の横時雨、
袖に餘りて窓をうつ、
ハアヽ降て來たさうなと、
西受の竹連子、
反故障子を細目に明け、
見るや野風の畠道、
背しぶきに降る雨の、
『彼に見ゆるが親父樣。』
『綟の肩衣つけたのが、
はア孫右衛門さまかいの。』
『これ今生のお暇。』と、
手を合すれば梅川も、

親の見はじめ見終めの、
『私は嫁』と獨言、
夫婦もろとも手を合せ、
咽び入りてぞ歎きける、
孫右衛門は老足の、
休み〳〵て門を過き、
野口の溝の水氷、
滑るを留まる高足駄、
鼻緒は斷れて横樣に、
泥田へ瓦破と轟込んだり。

三

『何處も痛みはしませぬか、

お年寄のおいとしや、
お足も濯ぎ、
鼻緒もすげて上けませう、
少しも御遠慮なさるゝな。』
腰膝撫て勞はれば、
孫右衛門起上り。
『誰方やら有難い、
お蔭で怪我も致さぬ、
若い上臈のお優しい、
年寄と思召し、
嫁子もならぬ御介抱、
寺導場へ參つても、
これ此處の一心ぞ、

邪見では參らぬも同然、
此方が眞の後世願ひ、
最う手を洗ふて下され、
幸ひ此處に藁もある、
鼻緒は儕がすげましよ。』
懐中探り孫右衛門、
塵紙出すを梅川は。
『好い紙が御座んする、
紙捻撚つて上ませう。』
延紙裂く手元口紅の、
指に殘るも何とやら、
いぶかる老の孫右衛門。
『先此方は此處邊に、

見も知らぬお人ぢやが、
何方な
懇切に
顔をつれ〳〵
梅川いと
『あゝ我
私が舅
恰當お
姿格好
外へす
さら〳〵
お年寄
臥病み

熟々と推量し、
有繋恩愛すて難く、
老の涙にくれけるが。
『ムヽ和女の舅に此爺が、
似たといふての孝行か、
嬉しい中に腹が立つ、
年長た悴を仔細有て久離切、
大坂に遣せしに、
根性に魔が魅いて、
大分人の金を過り、
揚句に土地を走つて、
此在所まで詮議の最中、
誰故なれば嫁御故。

近來愚痴な事なれども、
世の譬へにいふ通り、
盜みする子は憎からで、
繩かくる人が恨しい、
久離切た親子なれば、
善いにつけ悪いにつけ、
構はぬ事とは言ひながら、
大阪へ養子に往て、
悧潑で器用で身を持て、
身代も仕上た彼樣な子を勘當した、
孫右衞門は痴氣者、
阿呆者と言はれても、
その嬉しさは如何あらう、

今にも探し出されて、
繩にかゝつて引かるゝ時、
好い時に勘當した、
孫右衛門は出來した、
仕合せぢやと褒められても、
其悲しさは如何あらう、
今から思ひ過されて、
一日も早く往生させて下されと、
拜み願ふは今參る、
如來樣御開山、
佛に嘘はつかぬぞ。』と、
土に摚と平伏て、
聲をはかりに泣ければ、

梅川も聲を上け、
忠兵衛も伏拜み、
身を揉み歎き沈みしは、
道理とこそ聞えけれ。
恨みつ泣つ孫右衛門、
猶も悲しみ狂ひしが、
涙の隙に巾着より、
銀子一枚取出し。
『これは難波の御坊の、
御普請の奉加金、
今此處に有合せた、
嫁御と存じて遣でもなし、
只今のお禮の爲、

此邊に彷徨ては、
能ふ似たとて捕へるぞ、
良人は猶以て、
是を路錢にごせ海道へかゝつて、
一足も早う退つしやれ、
和女の良人にも、
詞こそ換さずとも、
鳥渡顔でも見たいが、
何卒無事な吉左右を。』
いや〳〵それでは世間が立ぬ、
涙ながらに二歩三歩、
行きてはかへり返りては、
『何と逢ふても大事あるまいか。』

『なんの人が知りませう、
逢ふて遣て下さんせ。』
『あゝ大阪の義理は缺れまい、
何卒して逆様な、
回向させなと懇切に、
頼みまする。』と咽返り、
振返り〳〵、
泣く〳〵別れ行く跡に、
夫婦はわつと伏轉ひ、
人目も忘れ泣居たる、
親子の中こそ敢果れ。

姿を隠す古簑や、
雨のあしべも亂るゝ心、
死して忘れぬこの情、
深く忍びて出てけるが、
身に罪あれば降りかゝる、
繩目の科のぬけ難く、
ふたり引かれて新口の、
里で包んだ百千鳥、
めんない千鳥手拭は、
佛の慈悲と引絞り、
泣くは梅川河千鳥、
水の流れと身の行衛、
戀に沈みし浮名のみ、

冥途の飛脚（終）

難波に遺し留まりし。

友女郎の眞中で、可愛い男が恥辱をとり、
そなたの心の無念さを晴らしたいと思ふ
より、ふッと金に手をかけて――（忠兵衛）

あさましい氣にならんした、かうは誰が
した、わしがした、皆梅川が故なれば、か
たじけないやら、いとしいやら――（梅川）

不許複製

明治三十九年四月十六日印刷
明治三十九年四月十八日發行

著者　清水橋村
發行者　東京市牛込區矢來町四十四番地　三好仲雄
印刷者　東京市京橋區日吉町十番地　中村彌助
印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店

發行所　東京市牛込區矢來町四十四番地　園屋書店

定價金參拾錢

園屋書店

坪内博士序　三木竹二水口薇陽兩先生校訂

近松全集

洋裝全三冊　菊版凡三千頁　總クロース
金文字入頗美本　定價各金壹圓六拾錢
小包料各金拾五錢　上卷既成　中卷近刊

目錄

上卷
△印ばは
▲天鼓△根元曾我▲一心五成
▲門出八島▲凱陣八島△盛
▲魂
▲出世景清△佐々木
▲世繼曾我▲出
▲日本西王母▲松風
▲天智天皇△日
▲帶雨東鑑▲村
▲源氏冷泉節
▲判官盛久△主馬判官
▲東鑑▲朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧徳▲大掛物十幅一對▲曾我五人兄弟▲大磯虎
▲釋迦如來誕生會▲鎌田兵衛名所盃△
▲久△鑑

中卷
△印ばは
▲天鼓△根元曾我▲一心五成
▲門出八島▲凱陣八島△盛
▲魂
▲出世景清△佐々木
▲世繼曾我▲出
▲日本西王母▲松風
▲天智天皇△日
▲帶雨東鑑▲村
▲源氏冷泉節
▲判官盛久△主馬判官
▲東鑑▲朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧徳▲大掛物十幅一對▲曾我五人兄弟▲大磯虎
▲釋迦如來誕生會▲鎌田兵衛名所盃△
▲久△鑑

目錄

卷未△印ばは
▲天鼓△根元曾我▲一心五成
未刻本▲魂
▲門出八島▲凱陣八島△盛
▲出世景清△佐々木
▲世繼曾我▲出
▲日本西王母▲松風
▲天智天皇△日
▲帶雨東鑑▲村
▲源氏冷泉節
▲判官盛久△主馬判官
▲東鑑▲朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧徳▲大掛物十幅一對▲曾我五人兄弟▲大磯虎
▲釋迦如來誕生會▲鎌田兵衛名所盃△
▲久△鑑

目錄

卷中△印ばは
▲天鼓△根元曾我▲一心五成
未刻本▲魂
▲門出八島▲凱陣八島△盛
▲出世景清△佐々木
▲世繼曾我▲出
▲日本西王母▲松風
▲天智天皇△日
▲帶雨東鑑▲村
▲源氏冷泉節
▲判官盛久△主馬判官
▲東鑑▲朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧徳▲大掛物十幅一對▲曾我五人兄弟▲大磯虎
▲釋迦如來誕生會▲鎌田兵衛名所盃△
▲久△鑑

卷未△印ばは
▲天鼓△根元曾我▲一心五成
未刻本▲魂
▲門出八島▲凱陣八島△盛
▲出世景清△佐々木
▲世繼曾我▲出
▲日本西王母▲松風
▲天智天皇△日
▲帶雨東鑑▲村
▲源氏冷泉節
▲判官盛久△主馬判官
▲東鑑▲朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧徳▲大掛物十幅一對▲曾我五人兄弟▲大磯虎
▲釋迦如來誕生會▲鎌田兵衛名所盃△
▲久△鑑

上卷
△印ばは
▲天鼓△根元曾我▲一心五成
▲門出八島▲凱陣八島△盛
▲魂
▲出世景清△佐々木
▲世繼曾我▲出
▲日本西王母▲松風
▲天智天皇△日
▲帶雨東鑑▲村
▲源氏冷泉節
▲判官盛久△主馬判官
▲東鑑▲朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧徳▲大掛物十幅一對▲曾我五人兄弟▲大磯虎
▲釋迦如來誕生會▲鎌田兵衛名所盃△
▲久△鑑

中卷
△印ばは
▲天鼓△根元曾我▲一心五成
▲門出八島▲凱陣八島△盛
▲魂
▲出世景清△佐々木
▲世繼曾我▲出
▲日本西王母▲松風
▲天智天皇△日
▲帶雨東鑑▲村
▲源氏冷泉節
▲判官盛久△主馬判官
▲東鑑▲朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧徳▲大掛物十幅一對▲曾我五人兄弟▲大磯虎
▲釋迦如來誕生會▲鎌田兵衛名所盃△
▲久△鑑

卷未△印ばは
▲天鼓△根元曾我▲一心五成
未刻本▲魂
▲門出八島▲凱陣八島△盛
▲出世景清△佐々木
▲世繼曾我▲出
▲日本西王母▲松風
▲天智天皇△日
▲帶雨東鑑▲村
▲源氏冷泉節
▲判官盛久△主馬判官
▲東鑑▲朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧徳▲大掛物十幅一對▲曾我五人兄弟▲大磯虎
▲釋迦如來誕生會▲鎌田兵衛名所盃△
▲久△鑑

目錄

卷中△印ばは
▲天鼓△根元曾我▲一心五成
未刻本▲魂
▲門出八島▲凱陣八島△盛
▲出世景清△佐々木
▲世繼曾我▲出
▲日本西王母▲松風
▲天智天皇△日
▲帶雨東鑑▲村
▲源氏冷泉節
▲判官盛久△主馬判官
▲東鑑▲朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧徳▲大掛物十幅一對▲曾我五人兄弟▲大磯虎
▲釋迦如來誕生會▲鎌田兵衛名所盃△
▲久△鑑

卷中

378

池本奇璨君作

詩集 玉ぶち 《近刊》

洋裝全一冊 定價金參拾錢 郵稅金四錢

象徵派の詩人前田林外君之に序して曰く―『奇璨君は詩僧也（中略）げに君が棲地は武藏野の名所、玉川の里、君が名は奇璨、それ其の碩學を翫びて而して玉淵を窺はざるは未だ驪龍の蟠まる所を知らずして文選なにがしは戛め眞珠を探らんとせば深く海底に潛入せよと詩人ブラウニングを警せしに非ずや』とこれ君が仰いて天空の高き所と、伏して海洋の深き處に玉淵を冥想したる秀什なり

本居豐穎先生閲 大江榮人先生編 《既刊》

教訓歌集

洋裝並製金四拾五錢 郵稅金六錢
全一冊定價上製金六拾錢 郵稅金八錢

教訓歌集は、古今名歌の純潔無垢にして、子女薫育の好材たるもの、無慮三千餘首を擇び、教育勅語に據りて、神祇、國體、教育、文學、武勇、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、修身、志操等に類聚したるもの、小、中、高等女、師範學校等に於ける、修身國語科の參考書として至要の寶典たるべく、亦詩人文學者にとりても無二の好伴侶たり

發兌元 東京市牛込區矢來町 園屋書店